Śikṣāsamuccaya における Ratnarāśisūtra の引用

浅　野　守　信

周知のように Śikṣāsamuccaya (=Śikṣ.) には百以上に及ぶ大乗仏典が引用されているが，今回は Ratnarāśisūtra (=RS) の引用について検討を加えたい。

さて，RS というのは，大宝積経の第四十四会たる宝梁聚会にあたる経典であり，他にチベット訳と下に見るように Śikṣ. 及び Prajñākaramati の Bodhicaryāvatārapañjikā[1] に引用されている他，中央アジア出土のサンスクリット断片[2] が残っている。また近年初期大乗仏教の性格を考える上で，一石を投じる経典であるとして，袴谷憲昭氏[3]，Jonathan Silk 氏の研究[4] が発表されている。

さて，この Jonathan Silk 氏の博士論文は RS を特に大乗仏教の成立という観点から分析した大著であり，RS の英訳，また Śikṣ. 及び中央アジア出土のサンスクリット断片より抽出したサンスクリット文を付したチベット訳校訂も含まれている。さらに巻末に「RS のテキストと関連資料」という appendix[5] が付されており，ここにに Śikṣ. おける RS の引用について興味深い問題が示されているので，以下に要約して示してみよう。

先ず，Śikṣ. においては RS の引用が9回あるが，そのうち最後の2回は現有の RS に対応箇所を見つけることができない。また Nāgārjuna の Sūtrasamuccaya (=Sūtras.)[6] には RS の引用が6回 ((a)—(f)) あるが，そのいずれも現有の RS に対応箇所を見つけることができない。そして Śikṣ. における最後の2回の引用は Sūtras. の引用のうち最後の2回の引用と全く一致している。

以上のことを，引用の判明している Śikṣ. の箇所を中心に表示すると，次頁のようになろう。

このことについて Silk 氏は次のような2つの可能性を示している。

①Śikṣ. 及び Sūtras. の著者がその帰属について記憶違いをした。

②Śikṣ. 及び Sūtras. の著者が見た RS にはこの箇所が含まれていたが，伝承されているうちにその箇所が欠落し，現在のチベット訳及び漢訳の RS には伝わらなかった。

本論は以下，これに第三の可能性を加えようとするものである。

	Śikṣāsamuccaya	Ratnarāśisūtra Tibet 訳	宝梁経	
(1)	55. 7——57. 10	159b3——162a5	643a26——644a18	
(2)	128. 3——129. 13	164b1——165b2	645a8——645b13	
(3)	129. 14——131. 9	167a3——168b8	645c27——646b20	
(4)	136. 9——136. 14	150a3——150a7	639c20——639c25	
(5)	137. 17——138. 11	151a6——152a1	640a23——640b11	
(6)	200. 12——201. 10	165b3——166b2	645b15——645c15	
(7)	201. 11——201. 19	163a4——165b2	644c1——644c12	
(8)	312. 3——312. 6	———	———	=Sūtras. (e)
(9)	312. 7——312. 21	———	———	=Sūtras. (f)

さて，改めてこの図表をみてみると奇妙な一致があることがわかる。すなわち，Śikṣ.において現有の RS にその引用が認められるところは Sūtras.にその引用がなく，逆に Śikṣ.で現有の RS にその引用がないところは Sūtras.にそのまま引用されているということである。これはどう考えたらよいのであろうか。

この問題を解決する手段として，Sūtras.と Śikṣ.の関係について見てみたい。さて，この両論書の間に引用経典の一致が多く見られることは，すでに佐々木考憲氏によって指摘されている[7]。その論文を基に，特にこの 2 箇所の RS の引用がある周辺を若干の修正を施して，抜き出してみると次のようになる。

Sūtrasamucaya (181b5—184a5) と Śikṣ. (297. 7—313. 9) の引用文献

Sūtrasamucaya 8 章		Śikṣāsamuccaya 17章
		1 Avalokanasūtra
30 Mahākaruṇāsūtra	>	2 Mahākaruṇāsūtra
31 Sāgaranāgarājaparipṛcchā	=	3 Bṛhat～ (=Sāgaramatināgarāja-pp.)
		4 Gaṇḍavyūhasūtra
		5 Śraddhābalādhānāvatāramudrā-s.
32 Bodhisattvapiṭaka	=	6 Bodhisattvapiṭaka
33 Bodhisattvapiṭaka	=	7 Bodhisattvapiṭaka
34 Tathāgatabimbaparivarta		
35 Ratnarāśisūtra (e)	=	8 Ratnarāśisūtra (8)
36 Ratnarāśisūtra (f)	=	9 Ratnarāśisūtra (9)
37 Anupūrvasamudgatasūtra	=	10 Anupūrvasamudgatasūtra
38 Sāgaramatiparipṛcchā	=	11 Sāgaramatiparipṛcchā

この箇所はSūtras.では8章，すなわち在家信者の法の成就について説くところ，またŚikṣ.では福徳の増大を説く箇所で，いずれもその手段として如来仏塔を供養することなどを述べている。経典名の前に付した数字はその章内における引用経典の順序を示している。

これを見ると，Sūtras.の30番 Mahākaruṇāsūtra から38番 Sāgaramatiparipṛcchā までが34番の Tathāgatabimbaparivarta を除いて，そのまま，もしくは少し短い形でŚikṣ.の17章の最初に引用されていることがわかる。ただし，Śikṣ.では最初に仏塔崇拝の功徳を説く1番 Avalokanasūtra の引用をを加え，31番 Sāgaranāgarājaparipṛcchā と32番 Bodhisattvapiṭaka の間に如来に会うことの功徳を述べた Gaṇḍavyūhasūtra と仏画を供養する功徳を述べた Śraddhābalāvatāramudrāsūtra の引用を加えたものと考えらる。また34番の Tathāgatabimbaparivarta はこの資料には反映されていないが，Śikṣ.の第8章，すなわち罪の浄化を説く章に，仏像を造ることによって業が対治できることの経証としてそのまま引用されている。

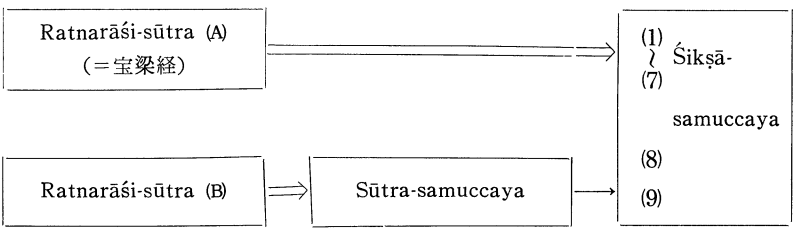
佐々木氏は先の論文においてはこれらの関係について明言を避けているが，現在ではSūtras.がŚikṣ.に先行することが確定している[8]ので，この箇所はŚikṣ.がSūtras.直接の影響を受けていることは明らかであろう。すなわち，Śāntidevaは Śikṣ.を著わすにあたって，座右にあったSūtras.のこの箇所をほぼそのまま取り入れたと考えてよいと思われる。そのように考えると，ここに引用される2カ所のRSは直接原本からの引用ではなく，Sūtras.に引用されていたものから再引用されたものである公算が強いのではないだろうか。するとŚikṣ.に引用されるRSは2種類あることになる。すなわち直接原本から引用された(1)から(7)まで，そしてSūtras.から再引用された(8)と(9)である。

ここでこの2種類のRS，すなわちŚāntidevaが見たものとSūtras.の作者たるNāgārjunaが見たものが同一であるかどうかということが問題となろうが，別のものである確率が高いと思われる。その理由は第1に先に見たように，Śāntidevaが見たものは7カ所とも現有のRSに含まれるのに対して，Nāgārjunaが見たものは6カ所ともすべて現有のRSに見られず，その間に全くの共通項が見られないことである。また内容から見ても，現有のRSすなわち「宝梁経」は主に修行者の山林修行や乞食の仕方，あるいは寺院の執事を司る比丘(vaiyāvṛtyakara)の役割などといった極めて実践的な内容を説く，いわば修行者の手引き書的性格を持っているものである。それに対して，Sūtras.に引用されるものは，小乗に

対する大乗の優越性(a)(b)，六波羅蜜の実践(c)，善知識への師事の重要性(d)，仏塔を造り，供養することの功徳(e)(f)といった大乗仏教の純然たる教理を説いていると考えられる点である。

かつて長尾雅人博士は，Ratna-kūṭa，Ratna-ākara あるいは Ratna-megha そしてこの Ratnarāśi という名前は「宝の集積」を意味し，「宝」とは「高貴な教え」を意味していたにちがいないと述べ，さらに「何らかの経が漸次成立し，それに随喜しそれを受持する人々がこれこそ「高貴な教え」であり「その集積」にほかならないと確信した時，それにふさわしい名前，たとえば「宝積」とか「宝頂」とか「宝雲」とかの名をもって，人々にも語り伝えたのであろうと思われる」[9]と続けている。つまりこの Ratnarāśi という名前は，たとえば「般若経」や「涅槃経」といったその内容を経題としているわけではなく，単に「高貴な教えの集まり」というぐらいな意味である。であるならば「高貴な教えの集まり」は必ずしも1つだけに限られるわけではなく，それぞれの「随喜し受持する人々」がそれぞれの「高貴な教えの集まり」を持っていた可能性も否定できないと思われる。

以上のことを結論的に図示すると次のようになろう。



使用テキスト

Śikṣāsamuccaya: Compiled by Śāntideva, edited by Cecil Bendall, Bibliotheca Buddhica 1 1902.

Ratnarāśisūtra Tibet訳：Ḥphags pa rin po cheḥi phuṅ po shes bya ba theg pa chen poḥi mdo, tr. by Surendrabodhi, Ye śes sde, P. vol. 24, p. 206. 5. 4—p. 217. 4. 1 (Ḥi146b—173b)・宝梁経：大宝積経宝梁聚会第四十四，北梁沙門釈道襲訳，大正蔵十一巻 pp. 638—645.

Sūtras.: Mdo kun las btus pa (Sūtrasamuccaya), SDE DGE TIBETAN TRIPIṬAKA BSTAN ḤGYUR DBU MA 15, 1979, Tokyo, 148b1—215a5.

Bodhicaryāvatāra with The Commentary Pañjikā of Prajñākaramati, ed. by P.L. VAIDYA, B.S.T.—No. 12, Darbhanga, 1960.

1)　2カ所ある引用は以下の箇所である。

	Bodhicaryāpañjikā	Ratnarāśisūtra Tibet 訳	宝梁経
a	70. 22—70. 24	165a5—165a6	645b4—645b4
b	70. 26	151b1	640a28—640a29

2)　Hoernle, August Friedrich Rudolf: Manuscript Remains of Buddhist Literature found in Eastern Turkestan, 1916, Oxford, pp. 116-121.

3)　袴谷憲昭「悪業払拭の儀式関連経典雑考（Ⅲ）」『駒沢大学仏教学部研究紀要』第51号，平成5年，(1)—(40)頁。

4)　Silk Jonathan Alan: The Origins and Early History of the Mahāratnakūṭa Tradition of Mahāyāna Buddhism with a Study of the Ratnarāśisūtra and related Materials, UMI Dissertation Services, 1995, Michigan. なお，同書は東洋大学の渡辺章悟先生のご好意により閲覧することができました。ここに記して感謝いたします。

5)　Ibid., pp. 637-705.

6)　一島正男「Sūtra-samuccaya の作者について」『印仏研』16-2，1968年。

7)　佐々木孝憲「シクシャー・サムッチャヤとスートラ・サムッチャヤの関係について」『印仏研』14-1，1965年，180-183頁。

8)　一島正男，前掲書。

9)　長尾雅人「『迦葉品』の諸本と『大宝積経』成立の問題」鈴木学術財団年報10，1973年，13-25頁。

〈キーワード〉 Śikṣāsamuccaya, Sūtrasamuccaya, Ratnarāśisūtra

（国学院大学非常勤講師）

掲載されなかった諸氏の発表題目(4)

陳代宣帝と仏教　諏訪義純（愛知学院大学）

『涅槃経』如来不定についての一考察　長沢　円（大谷大学）

南岳慧思の三昧について　鷲阪宗演（花園大学）

チベット訳「梵網経」について　釋舎幸紀（高田短期大学）

再びネパールでお盆の語源を考える　吉崎一美（東洋大学大学院修了）